

## 則天武后と多元性

河上麻由子

南北朝時代とは、漢帝国を支えた儒教の権威が低下したことを受け、様々な方法によって皇帝権威の再構築が試みられた時代である。佐川英治によれば、分裂から統合へと向かうこの時代、様々なバックグラウンドを持つ人々をまとめあげるため、皇帝権力にはかつてない多元性が求められた。王朝交代の激しい南朝の梁で、「菩薩戒弟子皇帝」という称号—大乘の菩薩であり、仏弟子であり、皇帝であるという複合的な称号—が誕生したのもその一端であるという。

称号にみえる権力の多元化が、最も進んだのが則天武后の時代であった。武后は即位後に「聖神皇帝」となった。693年に漢訳された『宝雨経』には、武后を転輪聖王とするための改ざんが加えられており、この漢訳を契機に、武后は「金輪聖神皇帝」となる。695年には、武後に「慈氏」=弥勒としての称号が追加される。薛懐義が695年2月に殺害されると「慈氏」の称号は速やかに削除された。695年9月に洛陽の南郊で祭祀を行うや、天冊万歳と改元し、「天冊金輪聖神皇帝」と称号を改めた。しかし、700年に中宗を立太子させたのにもない、「天冊金輪」などの称号は全て廃止された。

先行研究では、史上初の女性皇帝の即位を可能にするため、多元的な権威を必要としたと説明されることが多い。しかし、転輪聖王や弥勒としての権威を獲得した皇帝は、6世紀以降に複数見出せる。ここで、武后の権威の多元化は、女性であるが故の困難を排除するものであったのか、という疑問が生じよう。

本報告では、まずは先行研究によりながら仏教・儒教による権威強化について先例と継承者にも配慮しつつみていく。続いて武后が多元的な権威を必要とした背景を、高祖・太宗・高宗の権威のあり方と比較することで検討したい。それらの結果を踏まえ、武后の権威の多元性を、アジア史の中に位置付けることを試みるのが本報告の目的である。